

火野葦平「戦車なら」論

——青少年の戦意高揚を目的として——

増 田 周 子

はじめに

火野葦平は、日本の太平洋戦争の末期におこなったインパール作戦に、陸軍報道班員として従軍した。火野は、昭和一九年四月二五日に飛行機で日本を出発した。

インパール作戦とは、援蒋ルート遮断のために連合国軍の拠点、インド北東部の都市インパール攻略を目指した作戦で、第15軍司令官牟田口廉也のもとに、「烈^①」（第31師団）「祭^②」（第15師団）「弓^③」（第33師団）の三兵団が編成され、昭和一九年三月八日〜七月三日まで遂行された。この作戦は、四月初旬頃までの初期は、日本が優勢であった。牟田口も作戦実施は「天長節（四月二十九日）まで^④」とし、当初は雨期が来る五月以降は戦争を続ける気はなかった^⑤。短期決戦で臨んだが、インパールを攻略できないまま雨季になっても作戦を実行し、七月三日まで終了しなかった。長期化するにつれ、食料、物資などが欠乏し、三師団だけで36245人^⑥という多くの餓死者、負傷者、行方不明者を出し、歴史的敗北を喫した。インパール作戦は、補給線を軽視した杜撰で無謀な作戦であり、死の作戦とも呼ばれる悲惨な結果を残したのである。火野は、インパール作戦では、「弓」師団のルートと重なるルートを行軍していた。

また、火野は、インパール作戦中止後も雲南、フーコン作戦に向かった。自身は前線では闘わなかったが、兵士たちの死闘ぶりは現地でも耳にしていた。こうして火野は激戦地を行軍し、八月二七日には再度メイミヨウにたどり着き、ようやく九月六日ボルネオからマニラを経て七日那覇空港に到着し、無事帰国を果たす。実に四か月ほど戦地にいたのである。

火野は、生きて日本に戻ることは出来たが、悲惨な戦場の実態を目の当たりにし、その従軍記録を『従軍手帖』（4月25日から9月7日まで、全部で6冊）に残している。そこには、火野が見聞きしたインパール作戦と雲南・フーコン作戦の従軍記録全貌が記されている。さらに、これらの戦争の実体験をもとに、多くの、インパール作戦に基づいた、小説やエッセイなどを残している。

本稿では、そのうち、フーコン戦を描いた「戦車なら」という短編小説を考察する。さて「戦車なら」は、昭和九年一月一日に『若桜』（第1巻8号）に発表された。この『若桜』という雑誌は、発行元は大日本雄弁会講談社である。大日本雄弁会講談社の小玉邦雄（元本社取締役）の談によると、『若桜』発刊の経緯は次のようにある。

軍部から話があつて「幼年倶楽部」と「コドモエバナシ」を休刊し「若桜」と「海軍」が創刊されました。これは幼年雑誌は戦争協力にならない。もう少し大きな少年に向かつて、飛行兵とか戦車兵に仕向けるようにしたいということであつた。それに役立つような雑誌にしようというわけで、このことが行われたのです。⁵⁾

また、竹中保一談によると、

昭和十八年の十一月五日、丸ノ内茶寮で『少年倶楽部』が、海軍省報道部の高戸大尉に話を聞きました。(中略) 大尉から雑誌の用紙について、官給紙いわゆる㊦が相当あるので、これを講談社に回し、海軍の雑誌を出してみたいが、どうだろうと話がありました(中略) 陸軍のほうも話が進み、相前後して、決定したような順序です。(中略) 雑誌名は初め海軍のほう「若桜」が有望でしたが、陸軍のほう「若桜」と決まった(後略)。

とある。さらに竹中は、「十二月十日に話が始まり、急遽編集案をまとめ、翌十九年一月五日に大綱が決定しました。『海軍』の編集長は今までの関係上私が、また陸軍の『若桜』も同じ寡兵の少年雑誌として『少年倶楽部』の編集長の岩本氏がそれぞれ指名され、四月二十九日の天長節の日に創刊号が双方発売されました」と述べている。すなわち、昭和十九年に大日本雄弁会講談社から発刊された『海軍』は、海軍省の後援雑誌であり、『若桜』は陸軍省の後援雑誌であった。そして、両者とも青年の戦争協力に「役立つような雑誌」にしようとの意図で発行されたのであった。このような発刊経緯から、『若桜』は、昭和十九年五月に創刊され、昭和二〇年五、六月合併号にて終刊するまで二三号を発売しているが、時局色が相当強い。例えば、火野の「戦車なら」が収録された号には、次号の広告として、「待たれる『若桜』新年号」と題して「五月創刊以来、めざましい発展をとげてきた『若桜』は、いよいよ清新澁冽な陣容をもつて、決勝の気魄みなぎる新年号を送ることになった」とあり、「○霊峰富士山麓に鍛へる少年洗車兵／○少年正気の歌(詩画集)／軍事科学 爆弾の話 赤木技術少尉／軍事問答 小よく大を制す 中井中将／○偉勲万世に輝く陸軍特別攻撃隊」さらに連載小説として、「歴史小説 神風 角田喜久雄／航空小説 大空に捧げん大林清」などをあげ、「このほか、陸軍学校生徒の手記、特派記者の学校見聞記、漫画等、興味ふかい記事、読物を満載する」とある。まさに、陸軍色あふれるラインナップである。また、次のような広告を雑誌に掲載している。家

庭用常備救急薬金コロイド製剤オーラムキンの広告に、陸軍少年船舶兵の絵を描き「米英撃滅の機会は今だ我等に続け決戦の空へ!!」と記していたり、実体模型新作発表の広告に「模型も兵器だ！ 選べ品質！ 模型はツバサ」などと書かれたものである。太平洋戦争の末期で、もはや、食料すら儘ならない状況でありながら、軍が、青少年向けの雑誌にて、青少年たちを軍国主義に扇動していくさまがうかがわれる。さらに若桜という言葉は、「大君のために散らん若桜」や、「偉業を継がん若桜」などとあるように、自らの命を日本や天皇に捧げ、敵兵と戦い、死んでいった若い青年兵士たちを指している。雑誌『若桜』は、戦争に勇敢に立ち向かって美しく死んだ若者の魂を讃える意味も込められているのだ。

これらの背景を考慮に入れながら、さらに火野が実体験した、あるいは見聞したフーコン作戦もふまえながら、「戦車なら」を論じていきたい。なお、「戦車なら」はこれまで論じられてこられなかったため先行研究は見当たらない。

一、フーコン作戦における戦車隊の重要性

フーコン作戦とは、簡潔に述べると、昭和一八年初頭から、第一八師団に命じられた「ミイトキーナ、フーコン及びパウンビン以北のチンドウイン河の二正面を含む北部ビルマ一帯の広大な地域」¹⁰を防衛する作戦である。のちには、第一五軍の隷下に入った第三一師団も任務を任されることになる。ただ、「輸送力の減少」¹¹などにより、「シンガポールやビルマの攻略作戦に偉功を立てた第一八師団も、フーコン作戦時には、士気の点は別として、物的戦力は著しく低下していた」¹²という。すなわち、相当苦戦を強いられた掃討作戦であった。

火野葦平は、昭和一九年九月に帰国後「フーコン地区」(『文藝春秋』昭和一九年一月)というルポルタージュを記し、「フーコン地区は原始不毛の地である。山地に生活してゐるカチン族は首を刈ることを好む獍猛の種族で、フー

コンとはカチン語で、『首の集積所』或ひは『髑髏』といふ意味であるといふ¹³と述べている。さらに、同ルポタージユで、昭和十九年イラワジ河を渡り、シユエグにいる火野ら兵士の頭上に、「敵は、八月三日、ミイトキイナを攻略することによつて、北ビルマに於ける要衝はことごとく我が手に帰し、レド公路を打通せしむるを得たと称」した内容の「伝單を撒いて行つた¹⁴」としている。すなわち日本軍は、ほぼ一九一九年八月には、完全敗退に近い様相であった。それでも、火野は同ルポタージユにて、「敵兵力をフーコン地区におびき入れたことによつて、インパール方面進攻作戦の迂りだしが非常にうまく行つたことは忘れられてはならないのである¹⁵」と述べる。フーコン地区に敵をおびき入れて行つた、フーコン作戦での戦闘はよほど重要なものであつたらしい。火野は、昭和一九年八月二二日に、三橋参謀より聞いた話として、

サズツプ付近が三月末、インパールヲ片ツケテ主力ハナガ平地ヲ通ツテ、フーコンヘ出ルトイフ牟田口閣下ノ手紙ヲモラツタ、インパール迄ノリダシガウマクイツタノハフーコン作戦のオカゲ、四月末マデガンバツテクレ、¹⁶と記している。実際に「インパール迄ノリダシガウマクイツタノハフーコン作戦のオカゲ」とも言えるようだ。このような、フーコン作戦の背景をふまえ「戦車なら」には、フーコン地区に敵をおびき入れた時の戦いの様子が描かれている。「戦車なら」の主人公私は、「ある日、中田部隊の村木少佐」と談話し、フーコン地区が「敵戦車の集積所みたいな工合になつた」と聞いた。村木少佐は次のように述べる。

「兵隊が敵の戦車を片つぱしからやつつけたからです。出てくる戦車の大部分を攔坐炎上させてしまつたので、

フーコン地区はまるで戦車の残骸でうづまつたも同じです。」

「兵隊にはおどろきました。まるきり、戦車をなめてしまつて、戦車がうんと出て来ればええなあ、などといつてゐる始末でしたよ。」

村木少佐は、「戦車学校で、あの西住大尉などいつしよに、戦車戦闘を演練した専門家」とされる。村木の「研究の結果として、これは兵隊の肉弾攻撃によるほかないといふことになつた」のである。西住大尉とは、おそらく西住小次郎大尉のことであろう。西住大尉は、日中戦争で、第二次上海事変から、徐州会戦まで戦車長として活躍するも、徐州会戦にて中国兵に打たれ、昭和一三年五月一七日、二四歳の若さで亡くなつた。死後は軍神として崇められ、菊池寛により『昭和の軍神西住戦車長伝』（昭和一四年九月、東京日日新聞社）が発刊され、昭和一五年には吉村公三郎監督により、映画『西住戦車長伝』などが作成された。こうして西住大尉の功績が、死後広く流布したのである。村木少佐も、西住大尉と同様、かなりの戦車通とされ、敵に向かうために肉弾攻撃を選択することにした。村木は兵隊を集めて以下の如くその方法を伝授する。

「(前略)動いてゐる時には仕事やりにくいので、まづ、これを止めるのだ。戦車地雷があれば止まるだらう。それから、戦車の装甲のいちばんうすいところ、砲塔の後部、つまり機関部の真上になるところに、破甲爆雷をしかける。置くだけよりも、これを結びつけることができれば、なほよい。さうしてこれに点火すれば、戦車は炎上して破壊されるだらう。」

このような方法で、敵の戦車に向かつていったのである。なお、火野の実際の『従軍手帖』にも、「戦車二台擱坐させたが、肉弾攻撃で、そのたびに兵力が減る。」ともあるので、日本軍の戦車攻撃のやり方としては、特攻隊のように、自らの死を恐れない攻撃の仕方は、常識的で当たり前だったのであろう。ただ、村木少佐は、戦車突撃の方法を教えながら「すこし気の引ける思ひを感じてゐた」。なぜなら、敵は「敵の掩護の中で弾丸を発しながら、疾走し」、「飛行機も協力し、砲弾も飛んで来るだらう」からであった。こんな中で「手のこんだ作業が果してできるか、どうか、自分が教へながらも確信がなかつたのである」。

二、敵戦車への日本軍の攻撃

さて、前章で、主人公私が、フーコン地区が「敵戦車の集積所みたいな工合になつた」と聞いた話をとりあげたが、実際の戦闘ではどうであつたのか。火野は、実際の戦闘について次の如く記している。

マインカン平原へ進入して来た戦車はわが絶好の餌物であつた。片端からこれを擱坐炎上せしめた。爾後あらはれた敵三個営百数十台の戦車のうち、百台に達するものが我の撃破するところとなつた。兵隊たちは戦車の来るのを待ちかまへてゐて、無限軌道やエンジンの音が聞えると、あ戦車かと馬鹿にした顔付きで飛びだして行くやうになつた。戦車なら大丈夫といふ自信をもつてゐたのである。⁽¹⁷⁾

さらに、フーコン戦を記した『戦史叢書インパール作戦』でも次の如くある。

このころ（二月二十七日ごろ）敵戦車が新たに陣地に現れた。そして約二〇両の戦車がわが予期に反し、右翼方面のヌガンガ付近のジャングル内から攻撃して来た。しかし、この地域はわが砲兵隊の火力準備地帯に含まれていた⁽¹⁸⁾ので、直ちに集中火を浴びせて四散敗走させた。

すなわち、フーコン戦での戦車隊は、実際もやはりかなり強かつたようである。作品は、次のように続く。

煙幕のなかから、無限軌道の音が聞こえてきた。エンジンの音もひびいてきた。戦車が驀進して来るのであることがわかつた。（中略）大砲や機関銃をやたらにうちまくる。これを掩護するやうに飛行機が頭上を飛んで、しきりに旋回しながら、わが陣地に爆弾を投じ、銃撃を加へてゐた。

日本軍も「圧倒されて」いるように見え、「村木少佐も考へて、少しがっかりしかけてゐた」。だがそうではなかつた。

森林の中から奇妙な号令のやうなものが聞えてきたと思ふと、破甲爆雷を肩にかついだ兵隊たちが、ばらばらと戦車に突進して行つた。（中略）兵隊たちはそれぞれ止まつてあばれてゐる戦車に近づいて、キャタピラに足をかけて戦車に飛び乗つた。

日本軍は、暴れ回つて銃を乱射する戦車に果敢に立ち向かつていった。そして次々に、戦車の掩蓋が「下から持ち上

げられようとする」のを、「ぐつと押さえつけて、その上に腰かけた」。そうしている間に別の兵隊が、藪の中から葛や蔓を引きずってきて「戦車にぐるぐる巻きにしぱりつけてしまった」。一方、「機関部のあたりに破甲爆雷をのせた兵隊は、針金でそれを車体にくくりつけた」。こうして兵士たちは、作業を続け、

一台、二台、三台と次々に戦車は爆破され、火を発して、紅蓮の焰に包まれた。さつきから頭上を飛ぶ三台の敵機は、しきりに銃撃を加へた。(中略) せまいジャングルの道を射撃するので、なかなかあたらなかつた。

掩蓋をひらいて、二人の敵兵が我さきに出ようとあらそつた。せまい穴なので、栓になつたやうにしばらく出られないでゐたが、やつと出た。出るのと爆発するのと当時であつた。二人の敵兵にはねとばされて、一人は地面に、一人は崖の下に落ちて行つた。戦車は火に包まれた。戦車にはどれにも乗員が何人かづつゐたのであらうが、逃げたのは一台だけで、あとは戦車と運命を共にした。

かなり日本軍は成功して敵の戦車を破壊したのであつた。さて、火野によるとこの作品での戦車隊の成功は、実際もそうだったようであり、以下のように述べている。

飛び出して行つた兵隊はまづ先頭と後尾の奴を戦車地雷で攔坐させる。すると中間の戦車は狼狽するがもはや動きがとれない。そこで兵隊たちはおのおの爆弾を持つて一台づつ飛び上り、装甲の薄い機関部の上にそれを結びつけて点火して来る。これはなかなか手の混んだ作業でよつほど度胸があつて落ちついてゐないと成功しない。

戦車の中から掩蓋をひらいて逃げだす敵兵もあれば、投降する奴もあり、抵抗する者もゐる。擱坐させられて掩蓋から出ようとするのを兵隊が乗りかかつて蓋を抑えつけ、降車と一緒にぐるぐる巻きにして爆破したこともあ
る。⁽¹⁹⁾

こうして、火野によると実際も「戦車はあまりやられるのでしまいには出て来なくなつた⁽²⁰⁾」という。また、火野は、実際に「同期ではないが西住大尉と同窓で戦車を習得したといふ指導将校」に会い、「簡単にできることぢやなし、どうかと案じてゐたら、兵隊が教へたとほりにやるのには驚きました⁽²¹⁾」と聞いた話を記している。すなわち、「戦車なら」での、フーコン戦における日本軍の敵戦車に果敢に立ち向かい、破壊する勇氣ある行動と、勝利は、実話に基づいていると言えるだろう。

三、藤木一等兵と母

さて、前章でこの「戦車なら」はフーコン戦での実話に基づいて描かれていることを指摘した。火野は、フーコン戦での一兵士について次のように述べている。

中には欲張つた兵隊があつて、山のやうに爆雷を背負ひ、つぎつぎに仕掛けて一度に三台も爆破させた。近くまで引きつけておいて速射砲で横腹を貫いて撃破したこともある。戦車爆破の戦果に対する鑑定は嚴格で戦車十台やつつけたといつても本部では擱坐か炎上かと聞きかへし、擱坐六、炎上四といふやうであれば、全部炎上せしめなければ戦果と認めないといふ。そこでまた兵隊はこのこと擱坐させた戦車を焼きに行く。⁽²²⁾

この兵士と同じような行動をする人物として、作中では藤木一等兵という人物が登場する。作品では、最初、藤木一等兵は、「動作がすこぶる緩慢で、なかなか作業がはかどらない」戦車一台に爆弾を仕掛けることもろのし、皆に「早よせ、早よせ。」とけしかけられていた。だが、一度成功すると、そのうち、「欲を出して、一台では気がすまなく」なり、ある時「彼は三台を一度に爆破炎上させた」。そして以下のように行動する。

例のごとくのろくさい手つきでやるのだから、手間がかかつて仕方がなかつたが、彼は五つの破甲爆雷を一度に肩にかつぎ、一箇づつ戦車に装置した。そのときは十数台の戦車がゐた。藤木はあたりを飛びかふ弾丸などはまるで眼中にないやうに、悠々と破甲爆雷を戦車に結びつけた。一つ終ると、また次に行つた。彼がのろのろと仕事をしながら、時々、きよろきよろとあたりを見まはしたり、うなづいたり、手をあげたり、にこつと笑つたりしてゐるのは、不思議な光景であつた。

作品では、藤木一等兵が母に手紙を書くシーンがある。藤木は、毎日手紙をしたためていた。内地に送る手紙は必ず部隊の検閲を受けなければならない。その検閲を部隊副官がおこなつた。その手紙には次のようであつた。

オ母サンハ、ワタシガ小サイトキカラ、ノロノロ仕事ヲスルノヲ笑ツテキマシタネ。シカシ、オ母サンハオコツタコトハアリマセンデシタネ。ワタシハ敵ノ戦車ニトビ乗ツテ、爆弾ヲククリツケタノデスガ、ヤツパリ、ブキヨウデナカナカウマクイキマセンデシタ。トコロガ、ワタシノ耳ノソバデ、早ヨセ、早ヨセ、トイフオ母サンノ声ガハツキリ聞エマシタ。オヤト思ツテアタリヲ見ルト、煙ノナカニ、ジツトワタシヲ見テキルオ母サンノ顔ガ

見エマシタ。ワタシハ元氣ガ出テ、仕事ヲツツケマシタ。

こうして藤木一等兵は、敵の戦車を爆破することが出来たのである。手紙の最後は、「コレモオ母サンノオカゲデス。アリガトウゴザイマシタ。戦車ナド、ワケハアリマセン。屁ノカツパデス。コレカラモ、ウントヤツツケテヤルツモリデス。」と締められている。つまり、火野は、フーコン戦の戦車隊の指導者から、先のような勇敢な兵士の話を聞き、その兵士を、普段のろくさい藤木一等兵として作中に登場させた。藤木は、いつもはのろまだが、戦場でふと母の声を聞き、母の顔を見、そのことに励まされて普段はできないような偉業を果たしたという話を作中で描いた。この母が藤木を励ますシーンは重要である。火野は、昭和一三年頃に描いた兵隊三部作⁽²³⁾から、ヒューマニズムに満ち溢れた戦争シーンを描いてきた。例えば、「土と兵隊」での、死にかけた母が、赤ん坊を守り、それを見た兵士がそつと毛布をかけて行軍するさまなどである。この「戦車なら」での、母のシーンも同様で、いかに銃後の人々の兵士を思う愛が、過酷な戦闘に立ち向かう兵士を支えるかを作中で描いているのである。

このあと、藤木一等兵はマラリアにかかり、「四十度以上の熱が出た」。藤木は、「戦闘をすることもできなくて」、「第一線の戦地から下げられた」。

藤木一等兵は水にぬらした手拭ひを額にのせて、生ひしげつた樹木の間から望まれる青空を見てゐた。(中略)彼の頭の中を故郷の村の風景がながれ、なつかしい母の顔が去来した。

こうして藤木は起き上がり、「戦闘のある方へ危かしい足取りで歩いて行つた」。副官は藤木を見て驚いた。なんと、

藤木は「病氣をしてをっても、戦車ならやつつけることができます」と言ったのであった。副官は、「藤木一等兵をりつばな兵隊だと思つたが、そんな顔は見せずに、彼を叱りつけて、病室の方へ押しかへした」。

藤木一等兵は、母や故郷を思い出すことで、高熱をもふるいのけ、戦車をやつつける任務につこうとしたのである。母の声や故郷の思い出が、藤木の力を支えた。本作では、銃後の人々の支えがいかに兵士を励ますかということを通して調している。最後は次のような場面で作品は終わる。

「マラリヤの奴、はやく出てゆけ。」

藤木一等兵は自分の熱病がはがゆくて、涙をぼろぼろ流しながら、さう、何度も何度も呟やいてゐた。ところが、マラリヤが全快して、藤木一等兵は、また敵戦車の来るのを待ちかまへたけれども、その後は戦車に会ふことがなかつた。ほとんど百台に近い戦車を爆破された敵は、恐れをなして、もはや戦車を戦場に出さなくなつてゐたのである。

実際の戦闘では、確かに日本軍が敵戦車を爆破することもあったが、ほとんど劣勢であり、「フーコン作戦開始以来一九四四年四月十五日までの損害は、第二十二師戦死約八〇〇、負傷約二、〇〇〇、第三十八師戦死六五〇、負傷約一、四五〇であった」⁽²⁴⁾とある。火野も「食料弾薬は欠乏し、兵員もしだいに多くの損耗を出した」⁽²⁵⁾と述べている。フーコン戦が劣勢であったことは、誰もが承知であったが、本作では、当時の銃後の人々の士気が萎えることを恐れ、また、『若桜』が陸軍の後援雑誌であることを考慮し、あくまで、日本軍が少しでも努力し、勝利に導くことのできた戦車隊の様子を描いている。

終わりに

本稿では「戦車なら」を論じてきた。先にも述べたように、発表誌の『若桜』は、陸軍が関係して発刊された雑誌である。また、若桜という呼称は、自らの命を天皇に捧げ、日本国のために戦い、尊い命を失った青年兵士を讃える言葉でもあった。本稿で記したように、本作で扱われた戦車隊の様相は、実際のフーコン戦でも活躍した戦車隊の様子と重なる点はある。しかし、実際のフーコン戦は、やはり、極めて劣勢で、到底本作のように勝利した戦闘ではなかった。火野は、戦時中は、陸軍報道班員としての役割を担わされ、意識して銃後の人々の戦意の昂揚に努めた。火野は、「送れ・敵撃滅の飛機 印緬国境越える日・本社特派 火野葦平／激しい自責の念 まだまだ銃後の努力は足りぬ 敵機連爆も介せぬ我軍の士気」の中で、「前線の将兵が銃後は一体何をしてゐるのだと考へるやうであつては申訳がないのである」⁽²⁾とも述べる。過酷な状況下で、戦闘に向かう兵士たちにとって、銃後の人々の励ましや、愛、そして兵士を思いやる心が大切であるとし、陸軍報道班員であつた立場を認識し、銃後の人々の士気が衰えぬように、そしてそれに支えられた異国で戦う兵士たちの士気が萎えぬように十分配慮を続けた。

本作は、まさしく、銃後の青少年たちの戦意高揚を煽るための作品であり、また、それを担った講談社と陸軍を擁護する作品となっていると言えよう。

注

(1) 『戦史叢書インパール作戦』（昭和43年4月25日、朝雲新聞社）

(2) 1に同じ

- (3) 大本営が、インパール作戦中止を認めたのは7月1日、2日に南方軍が正式に中止をみとめる軍令を出す。よってこの日から終結とするのが通例である。
- (4) 磯部卓男『インパール作戦』（昭和五九年六月、丸ノ内出版）
- (5) 社史編集委員会『講談社の歩んだ五十年（昭和編）』（昭和三四年一〇月、講談社）
- (6) 5に同じ
- (7) 5に同じ
- (8) 『東京朝日新聞』（昭和一七年三月七日、三面）
- (9) 『東京朝日新聞』（昭和一九年二月二七日、三面）
- (10) 1に同じ
- (11) 10に同じ
- (12) 1に同じ
- (13) 火野葦平「フーコン地区」（『文藝春秋』昭和一九年一月）
- (14) 13に同じ
- (15) 13に同じ
- (16) 火野葦平『インパール作戦従軍記』（平成二九年一〇月、集英社）
- (17) 13に同じ
- (18) 1に同じ
- (19) 13に同じ
- (20) 13に同じ
- (21) 13に同じ
- (22) 13に同じ
- (23) 『麦と兵隊』（昭和一三年九月、改造社）、『土と兵隊』（昭和一三年一月、改造社）、『花と兵隊』（昭和一四年八月、改造社）の三作をさす。

關西大學『文學論集』第六十九卷第四号

(24) 1に同じ

(25) 13に同じ

(26) 『東京朝日新聞』(昭和一九年五月二八日、三面)

本稿は、令和元年度国際児童文学館「特別研究員」の研究成果である。